



「船舶とザトウクジラの衝突」

4月11日、西島の南東約1kmの海域で船舶とザトウクジラ（以下：ザトウ）の衝突が発生しました。複数の目撃情報とヒアリング、さらに海洋センターによる個体照合作業の結果、①負傷個体は今年生まれの子クジラと思われ、少しずつ衰弱し衝突1時間45分後には確認されなくなった、②母親と見られるザトウO-211（個体識別番号）が子クジラを水面に持ち上げるような行動をとっていた、③衝突2時間40分後にはO-211は別の群れと行動を共にしていた、等の事実が分かりました。

船舶に乗船していた方々に怪我はありませんでしたが、船舶はシャフトとプロペラの一部が損傷し、通常航行が困難な状況となりました。乗船者の方々の証言によれば、「船舶の周囲にはザトウを確認できていなかったが、航行中に突然船に大きな衝撃を感じた。」とのこと。船舶の損傷状況とヒアリングから、ザトウは船の真下から浮上してきたものと推測されます。

この他、今年3月に母島及び父島の両海域で、船舶との接触によってできたと考えられる傷跡を持つザトウ（写真）が目撃されています。船舶と鯨類の衝突は国内外を問わず世界各地から報告されており、船舶を所有する誰にでも起こり得る問題です。衝突した場合、鯨類はもちろんのこと人や船舶にも大きな被害を与えかねません。

OWAは三日月山展望台でザトウの定点観測調査を毎朝実施しています。図は平成21年12月から平成22年3月にかけて調査で確認されたザトウの発見位置を示したものです。今回衝突が確認された西島南東海域だけでなく、浅海域（水深が200mより浅い海域）全域でザトウが発見されているのがお分かりでしょうか。



図1. ザトウの発見位置(黒丸)

プロペラの接触で負ったと思われる傷跡が、体の右側面の前方から後方にかけて大きく広がっている。

撮影者：中西健二 撮影協力：クラブノア

一見、船舶の周囲に鯨類が見えなくても、今回のように突然鯨類が海面に浮きあがってくることも考えられます。また、今年は湾内にも一度ならずザトウが入って来ています。小笠原でザトウが確認される12月頃～5月頃にかけて浅海域を航行する際、常にザトウの噴気（ブロー）に注意するだけでなく、航行速度を遅くする、等の配慮が必要かもしれません。皆様も十分にご注意下さい。



「ピアス、鳥島にお引越し？」

3月下旬、神奈川県藤沢市にある日本大学生物資源科学部にて、日本水産学会春季大会が開催されました。会場の受付で渡された講演要旨集はとても分厚く、お目当ての題目を探すのに苦労しましたが、鯨類に関する発表を聞きに、いざ発表会場へ！

会場では生理や遺伝、音響などに関する発表があり、質疑応答では盛んに意見交換が行われていました。今回はその中から、伊豆鳥島でのミナミハンドウイルカ調査の発表について紹介したいと思います。

皆さんもご存じの通り、OWAではイルカ調査隊が、ミナミハンドウイルカの個体識別調査を小笠原周辺海域で行っています。現在までに215個体が識別されており、講演内容は、その中の1頭ピアス（個体識別番号 #39）が伊豆鳥島で目撃されたというものでした。

伊豆鳥島では、三重大学や京都大学など、多くの研究機関から生態・行動・音響・遺伝子解析の専門家が集結し2008年10月に調査が行われました。鳥島の調査グループとOWAがそれぞれ所有している個体識別写真を照合した結果、ピアスが鳥島にいるという事が明らかになったのです。

これまでにOWAが行った調査では、ピアスは2006年に目撃されたのを最後に、小笠原では確認されていませんでした。今回、小笠原から400キロ以上も離れた鳥島までの移動が明らかとなりましたが、この分布の変化が、成長によるものなのか、それとも季節によるものなのか、詳細については分かりません。

しかし、今回の結果は、ミナミハンドウイルカの分布や移動に関する貴重な情報であることは確かであり、長期に渡って調査を続けた、イルカ調査隊ボランティアメンバーの努力の賜であります。

今後もイルカ調査を継続し、他の地域とのネットワークを大事にしながら調査を行っていけば、また新たな知見が得られるかもしれません。

皆さん、今後にご期待ください。お楽しみに！



青ビレにある穴が特徴のピアス